

旭川市でのアイヌ語地名を平等に併記する地名表示の試みについて

小野 有五
(北海道大学名誉教授)





松浦武四郎1859 『東西蝦夷山川地理取調図』
によるアイヌ語地名の採集・記載(9800地名)

アイヌ語地名の音をカタカナで表記

領土化・植民地政策・同化政策

1858年,国学者,前田夏蔭(露西亞応接掛手付)

「蝦夷地名真字相体定候ニ付奉伺候書付を林大学頭家に提出,アイヌ語地名を否定して,「内地国郡郷村之名ニ大凡同様ニ相見候様」にしたいと要請

漢語化 (大和朝廷以来の地名標準化政策)

和銅6年(西暦713年)の詔旨

(地名は、原則として、良い漢字2字で表記すべし)

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|-----|---|-------|----|-----|
| A | イサリブト | → | 漁太 | B | ヲサツブト | → | 長都太 |
| C | マオイトー | → | 馬追沼 | | | | |
| D | シコツブト | → | 支笏太 | → | E | 千歳 | |
| F | ランコウシ | → | 蘭越 | G | ビビ | → | 美々 |

漢字地名だけを大きく表記、
アイヌ語地名は、
語源として小さく
書かれているに
過ぎない
北海道開発局
の地名看板
……これこそが
「制度的差別」





忠別川

川の名前の由来
アイヌ語でチウベツ【Chiu(波)-pet(川)】と呼び、波だつ川の意味が語源とされ、それが後の説によりチュプベツ【Chup(日)-pet(川)】となり、意訳して旭川という地名が生まれたともいわれています。

開発局



ちゅうべつ川

先住民族の
地名の
平等な併記

世界の常識！





Geraldine
Aoraki
MOUNT COOK

79

Methven
Mt Hutt

INLAND
SCENIC ROUTE

72

INLAND
SCENIC ROUTE

72

PEEL FOREST



1998年4月、「アイヌ語地名の平等な併記を求める集会」にかけつけてくださった小川隆吉さん



旭川市での「アイヌ語地名」の平等な併記に向けての懇談会でお世話になった太田満さん(左)と川村兼一(川村シンリッ・エオリパク・アイヌ)さん(右)



写真3 近文小学校正門わきに立てられた、アイヌ語地名を平等に併記した地名表示板



写真8 国道沿いにつくられた「ハルシナイ」の地名表示

アイヌ語地名表示板

チウ ペツ
Ciw-pet
波 川

ちゅう べつ
忠 別 川

波立つ川、急流の川の意味です。川の様子から、チウ リキン ペツ
Ciw-rikin-pet(波・高くなる・川)と呼ばれたとも言われています。

ただし忠別川のアイヌ語名については次のような説もあります。

チュブ ペツ Cup-pet(日・川)「旭川」はこれに由来します。

チュク ペツ Cuk-pet(秋・川) チュク チェブ cuk-cep(秋・魚→鮭)
が、秋になると盛んに上るところから名付けられたとされます。

旭川市教育委員会

アイヌ語地名表示板

チュク ペツ
cuk - pet
秋 川

ちゅう べつ がわ
忠 別 川

古くはチュク ペツ とよばれていました。

秋(cuk)には、鮭(cuk-cep)が、たくさん上ってきたためでしょう。

チュク ペツがなまって、チュブ ペツ(cup-pet 太陽・川)と発音され
それをもとに旭川という地名ができました。

また、急流なので、チウ ペツ(ciw-pet 波・川)という説もあります。

旭川市教育委員会

アイヌ語地名表示板

ウシシ ^{ウシシ} ペツ ^{ペツ} 牛朱別川
Usis-pet
蹄 川

鹿の蹄の跡がほとりに多い川という意味です。アイヌ民族にとって鹿肉は大切な食料の一つであり、蹄といえば鹿の蹄を意味しました。

ただし現在の川筋は1932年の切替工事後のもので、それまではロータリーのあたりを流れ亀吉付近で石狩川に合流していました。

旭川市教育委員会

アイヌ語地名表示板

キム クシ ペツ アイヌ川
Kim-kus-pet
山側 を通る 川

周辺にアイヌの人々の住居や通路があったため、明治期に入植した人々からアイヌ川と呼ばれるようになったと考えられます。そのころは、このあたりまで鞋が上っていました。

山側とは、岐登牛山の方角を指していると考えられます。本来の河川名であるアイヌ語地名を尊重しましょう。

旭川市教育委員会

アイヌ語地名表示板

キト ウッヌプリ

kito - us - nupuri

クガクニク 群生している 山

きとうしやま
岐登牛山

アイヌの人たちの重要な食料であったギョウジャニンニクがよく採れる山だったので、名付けられた。

道内各地にある山名である。

旭川市教育委員会



アイヌ語地名表示板

イシカラ

iskar

回流(蛇行)河川(?)

美しく作られた川(?)

いしかりがわ

石狩川

イシカラベツと読み、「回流(蛇行)」河川とする説と、イシュカラベツと読み、「美しく作られた」川とする説がありますが、正確な意味は不明です。

石狩川流域のアイヌ民族のカムイノミ(神への祈り)においては

アンコロ モシリ	私たちの大地
ヤウングル モシリ	ヤウングル(北海道のアイヌ民族)の大地
モシリ ノシキ ワ	大地の真中に
チエリキンテ	遡る
アンコロ イシカラ	私たちの石狩川

トナシタ。

アイヌ語地名の重要性

1

その地名をつけた人たちは、すでに「アイヌ語」を話していた、ということの証拠になる。

2

植民者、侵略者が来る前に、すでにアイヌ語地名があったことで、アイヌの「先住性」の証拠となる。

3

植民者、侵略者が「アイヌ語地名」を勝手に改変し、漢語化することは、「アイヌ」文化の破壊であり、アイヌが「先住民族」であることの証拠となる。

「先住民族の権利に関する国連宣言」

第13条

「先住民族は、彼・彼女らの歴史・言語・口承伝統、哲学・表記方法および文学を再活性化し、使用し、発展させ、そして未来の世代に伝達する権利を有し、ならびに彼・彼女ら独自の共同体名・地名、そして人名を選択し、かつ保持する権利を有する。」

(市民外交センター訳、2008)

「新しいアイヌ学」のすすめ

知里幸恵の夢をもとめて

小野有五 Ono Yugo



アイヌの人たちには、知里幸恵さんをはじめとして、自らを語ってきた長い歴史があるのに、和人のほうは、「アイヌ学」という「学問」の際に身を隠して、自らを語ってこなかったのです。アイヌの人たちは、和人と関わりのなかで、差別を受けながらも、さまざまなに自らを語ってきたのに、和人は、アイヌとの関わりのおかげで自分語りすることなく、研究対象にした「アイヌ」だけを書いていたのです。それを繰り返すことはもうやめよう、と思いましたが、そういう意味で、この本は、アイヌの人たちと関わってきた小野有五という一人の語り（ナラティブ）だともいえるでしょう。

アイヌも、アイヌでない者も、その力を信じ、お互いが心を開いて語り合いたい。アイヌにとっても、そうでない者にとっても、よりよい、平等な社会をつくっていきたい。それは知里幸恵さんが、一九歳で天に召されるまで、つねに彼女の同胞（ウタリ）のために祈っていたことだからです。

（はじめに「より」）

「新しいアイヌ学」のすすめ

知里幸恵の夢をもとめて



ISBN978-4-86578-357-5
CD066 V1300E
定価 本体3,300円＋税

●目次

はじめに

第1章 アイヌ語地名の平等な併記をもとめる

素人として声を上げたとき／旭川市での取組み／アイヌ語地名の政治学

第2章 知里幸恵を日本中に伝える

幸恵さんが語りてきたとき／妹の力／記念館の建設に向けて／幸恵さんの生誕百年／「銀のしずく記念館」の完成まで／幸恵さんの夢を語り継ぐ

第3章 シレトコ世界自然遺産にアイヌが関与する

シレトコ世界自然遺産問題とアイヌ民族／シレトコ・アイヌエコツアーをつくる／サッポロ・アイヌエコツアーをつくる

第4章 「先住民族サミット」で

アイヌから世界に発信する

2007年のできごと／「先住民族サミット」アイヌモシリ2008の開催／WIN-AINUの設立と前編

第5章 アイヌの歴史を取りもどす

考古学者・歴史学者のつくる「歴史」／最終氷期における日本列島への人間集団の移動／「縄文時代」―「統縄文時代」における「北海道の人間集団」の変容と発展／分子生物学が明らかにした「北海道縄文人」と「アイヌの人たち」／言語学・考古学・分子生物学を統合した見方／「縄文文化」「アイヌ文化」の精神性・素材の探究

おわりに 「新しいアイヌ学」のすすめ

[附]資料



小野有五 (おの・ゆうご)

1948年東京生まれ。北海道大学名誉教授。東京教育大学理学研究科博士課程修了（理学博士）。専門は自然地理学、第四紀学。「自然をみつめる物語」（全4巻：岩波書店）で第44回産経児童出版文化賞（1996）、地形学的研究による北海道での自然保護活動に対して第1回沼田賞賞（日本自然保護協会、2001）、「たまたか地理学」（古今書院）の刊行およびこれまでの研究に対して日本地理学会賞、人文地理学会賞、日本第四紀学会賞を受賞（2014）。本年、国際地理学連合より「顕著な地理学的実践」賞 2022（The IGU Distinguished Geographical Practice Award 2022）を受賞。「行動する市民科学者の会・北海道」事務局長として、原発や核ゴミの地層処分への反対運動を続けている。



日本人として初めて、国際地理学連合主催の「顕著な地理学的実践」賞(2022年)を受賞

本書は、四半世紀に亘る自身のアイヌとの関わりを通じた実践記録であり、自然地理学を専門とする著者が、氷河期から今日までの研究を通じて、「アイヌの人たち」の真実の歴史を描く問題作！

藤原書店 定価 本体3,300円＋税

アイヌから見た
アイヌの歴史
を提唱！



小野有五

藤原書店

- 「北海道の縄文文化」は、「縄文アイヌ文化」！
- 宗谷陸橋を歩いてきたマンモス・ハンターが、「古アイヌ語」を話す人たちの祖先？
- 「東北アイヌ語地名」が、「アイヌ語」の古さの証明！
- 最新の科学的データから、いま明らかにされる「アイヌ」の人たちの真実の歴史！

【カバー】
「言葉と歴史」による「アイヌ学」の発展
【カバー裏】
「アイヌ学」の発展
【カバー裏】
「アイヌ学」の発展
【カバー裏】
「アイヌ学」の発展

第5章 アイヌの歴史を取りもどす

歴史学者の定義
和人・外人の文書に
記録されたのが
「アイヌ」

考古学者の定義
歴史学でいう「アイヌ」
の時代から出土した
モノが「アイヌ文化」

私の定義
「アイヌ語」系言語
原(プロト)アイヌ語、
古アイヌ語を話して
きた人たちが
「アイヌ」

進んでいる
沖縄の
歴史教科書

沖縄
ウチナンチュから
の視点・史観

“アイヌ”を過去に
押し込めようとする
歴史学・考古学

← アイヌから見た
歴史の再構築が
必要

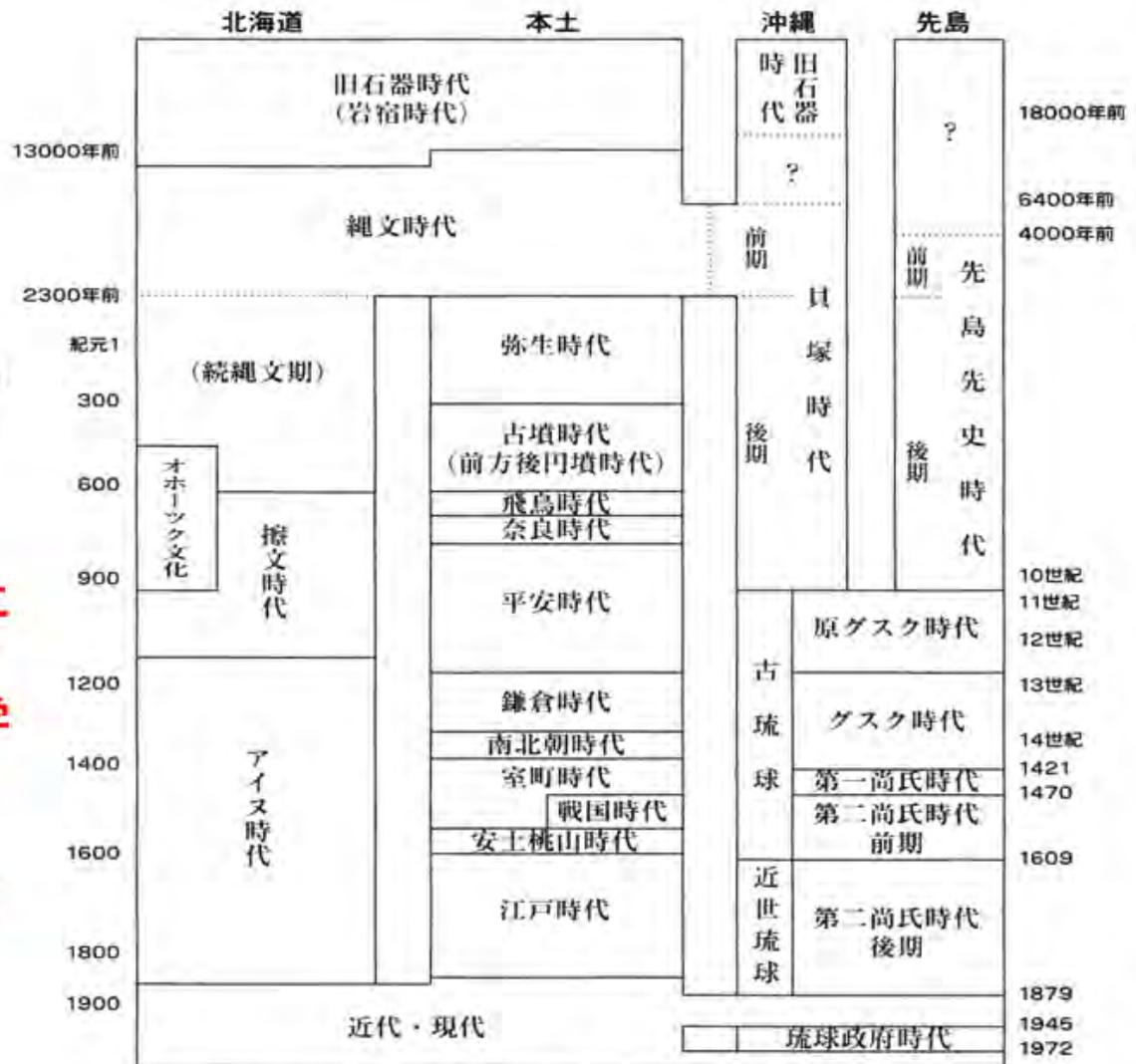
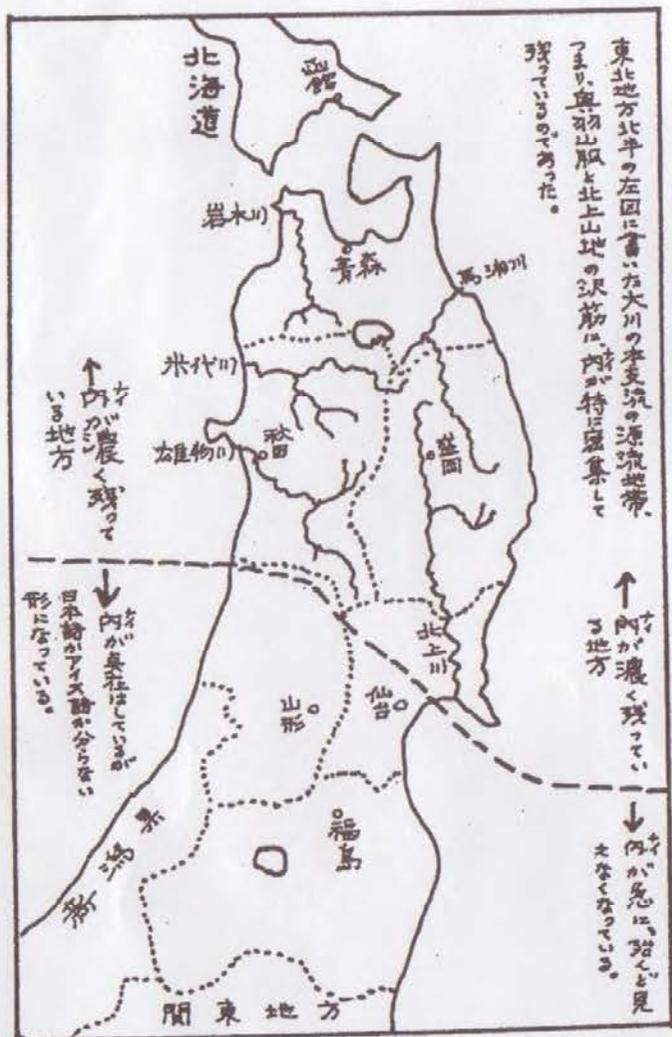


図1 北海道・本土・沖縄の歴史展開の概念図

名護市史資料編4 考古資料集 (平成10年3月 名護市史編さん委員会編集・名護市発行)

山田秀三による東北のアイヌ語地名の研究



北海道の土器が、東北でも使われていた！



秋田県寒川II遺跡第5号出土の土器。後北C2式（秋田県埋蔵文化財センター蔵）。



北海道江別市町村農場遺跡出土の後北C2式注口付深鉢（旭川市博物館蔵）。

北海道で使われていた土器の分布と
アイヌ語地名の分布がぴったり一致する！

地理学者は「分布」を最も重視する

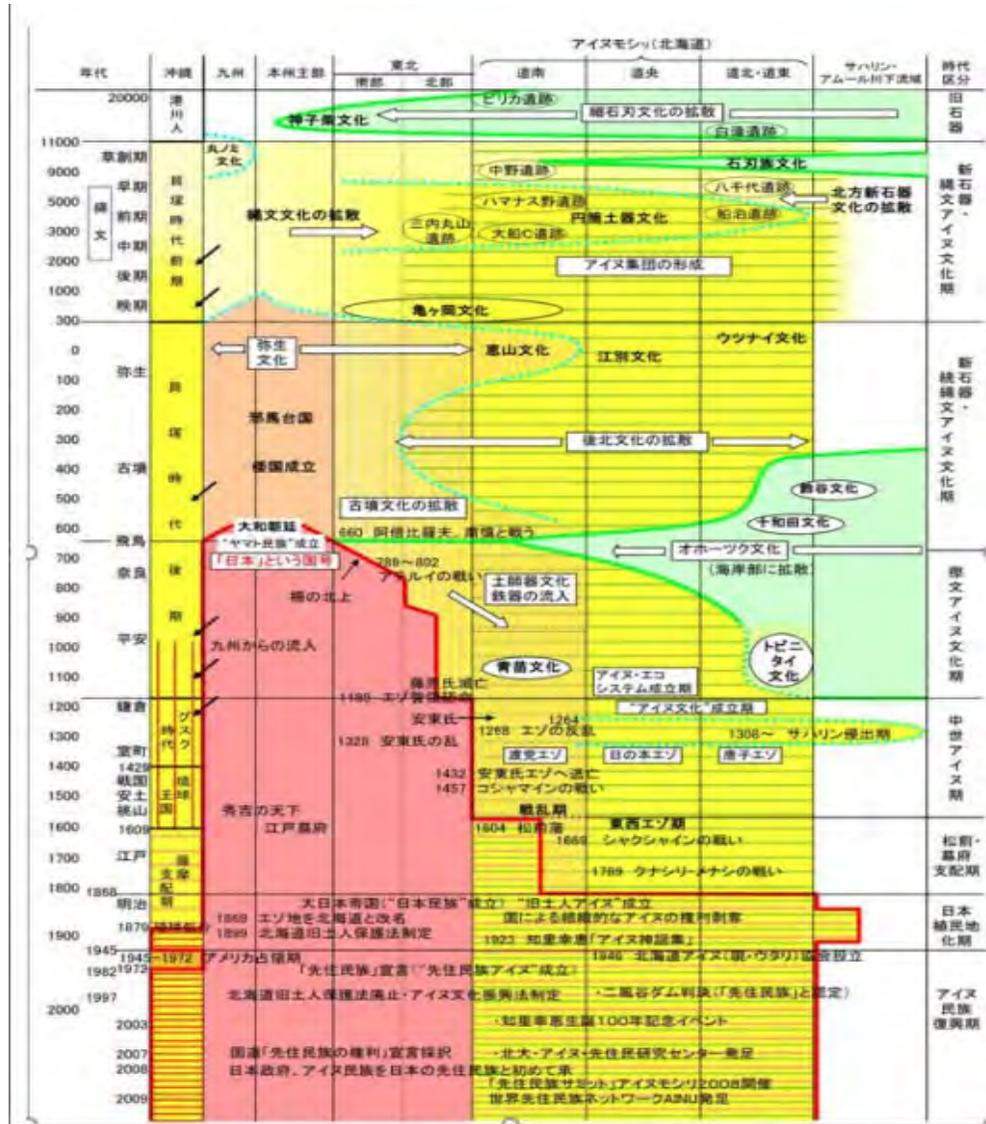


(原図:『アイヌ語地名の研究』1.1982、山田秀三1971より吉田敏氏作図)

地理学者は「歴史」を時空間分布でとらえようとする

たいていは南から北へ人間集団は移動してきたが...

アイヌ語地名の存在そのものがアイヌから見たアイヌの歴史の構築にとって重要な役割をもつ



口絵3 最終氷期から現在までの日本列島とその周辺の歴史・地理年表
 第5章に掲載の論文7の図2に相当。北海道では、北方からきた人間集団(黄色に緑の横線)が、本州から北上した縄文～和人文化を受容しつつ現在まで存続したことを示す。

人類の移動が北から南に生じたのは3回しかない。

1 最終氷期～完新世初期

2 アイヌ語を話す人たちが東北まで南下した
 3～5世紀頃

3 オホーツク人の南下した
 5世紀～12世紀頃

1 以後、ずっと現在まで北海道に住み続けてきた人たちが「アイヌ」。

オホーツク文化、南からの縄文文化、和人(ヤマト)文化の影響を受けつつも、一貫して「アイヌ語」を話し続け、DNAも変容させながら生きてきた、ダイナミックで、かつ、最も長い歴史をもつ人たちが「アイヌ」である。